

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.11〉

〈西岐波② 課題とキーマン〉

地区内では萩原団地、柳ヶ瀬など古くからの住宅地に加え、遊休地の宅地開発が進み、4月時点の市内地区別の総人口と世帯数はともに2番目に多い。しかし、高齢化が年々進む中で、主要団体では働き盛りの世代との交代がうまくいかず、コミュニティ活動の衰退で人間関係の希薄化が懸念されている。幅広い年代が気軽に行事に関わる受け皿となり、地域の絆とにぎわいを取り戻そうと取り組んでいる団体が「西岐波ひと・まち・絆だ。

絆とにぎわい再興へ“お助け隊”出動



放課後子ども教室で子どもと触れ合う肥塚会長（提供）

行事支援から災害対策の指導まで

立ち上げは2018年。生涯スポーツとしても知られるインディアカの競技人口の拡大に努めていた団体を母体として

結成した。その後はインディアカの普及に限らず、地域のために多様な活動ができる団体を目指して発展してきた。

メンバーは40～50歳代と各種団体の中では若い世代を中心に、さまざまな経験をもつ24人で構成。総合文化祭や白土サンセットフラフェスタ、リフレッシュ瀬戸内海岸清掃など、地域行事のお

助け隊として汗を流す。ふれあいセンターで開かれる放課後子ども教室では、絵はがき作りや飯ごう炊飯、災害時における命の守り方などを指導。活動の幅は広い。

「活動を通して普段から顔を合わせ、助け合える関係性を構築したい」と肥塚秀樹会長（51）。

2011年の東日本大震災で被災した福島県いわき市と、16年の熊本地震で大きな被害を出した御船町を訪れた際、長期化する避難所生活での避難者同士の関わりに触

れ、乗り越えるには住民同士の協力と役割分担が肝になることを実感した。

準備や運営、撤収までの「手間」を楽しめる催しを企画し、行事に参加する若者を少しずつ増やしたいと思い描く。「経験を他の団体で生かす。その積み重ねが課題解決の一步になるはず」と力を込める。西岐波ひと・まち・絆の活動が、まちおこしにつながることを期待し、その背中を見たい子どもたちが将来、西岐波を盛り上げる人材として活躍してくれることを願っている。